２０２４年１０月１３日（日）　　於札幌発寒教会

安息日だからこそ

（ルカによる福音書１４：１～６、出エジプト記２０：８～１１）

今朝は、ルカによる福音書１４章１節から６節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「安息日に水腫の人をいやす」と言う小見出しがついた個所が、説教のテキストになります。これまでも、ルカによる福音書は、主イエスが安息日に病人を癒された記事を、二度も載せているのです。だから、今日のこの個所は、三度目と言うことになります。でも、内容は全く同じと言うわけではなく、少しずつ異なっています。最初に出て来るのは６章６節から１１節までなのですが、場所は会堂、即ちシナゴーグで、癒されたのは手の萎えた人（男性）でした。次は、１３章１０節から１７節までで、場所は同じく会堂なのですが、癒されたのは１８年間も腰が曲がったまま、真っ直ぐに体を伸ばすことのできなかった人、こちらは婦人でした。そして、第三番目が今日の箇所になるのですが、場所は、前二回とは違って、会堂ではなく、或るファリサイ派の有力者の家で開かれた昼食会でのことでした。癒されたのは、水腫を患っている人（男性）でした。このように、同じく安息日に主イエスが病に苦しむ人を癒された、とは言っても、場所も、病の種類も、癒しが起こった際の状況も、それぞれに、異なっているのです。だから、無造作に、“主イエスによる安息日での癒し”と題して、三つの記事を、一括して取り上げて、それで済ますわけには行かないのです。それぞれの記事には、それぞれの独自性があって、これを見落とすわけには行かないからです。と言うわけで、私たち、今日の箇所を学ぶに当たって、この個所にしかない独自性に注目しながら、共々に、心して、学びを進めてまいりたいと思います。

今日の箇所は、こう書き出されています。「安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた」。或る安息日に、ファリサイ派に属する議員の一人が、主イエスを自宅に招き、昼食を供した、と言うのです。新共同訳聖書は、主イエスを招いた家の主人を、「ファリサイ派の議員」と訳していますが、以前私たちが用いていた口語訳聖書では、「ファリサイ派のかしら」と訳されていました。英語の聖書では、主に、リーダーと訳されています。ファリサイ派に属する者たちは沢山いましたから、それを束ねるリーダーがいても可笑しくはありません。その中でも、かしらと仰がれる人もいたのでしょう。町の有力者であって、或いは、町の会堂の管理、監督を委ねられていた会堂司だったのかも知れません。その日の礼拝では、彼が、主イエスに説教を依頼し、そのお礼にと、彼は、自宅に主イエスを招き、特別に主イエスのために昼食会を催したとも考えられるのですが、でも、そうであったとしたら、元々は、彼の好意で催された昼食会であったものを、仲間のファリサイ派の者たちは、悪しき下心を持って、その場を利用しようと、主イエスを試みる試験場、或いは、貶め、嵌めるための罠を仕掛ける忌むべき場所に変えてしまったのです。と言うのは、「人々はイエスの様子をうかがっていた」と、言われているからです。ここで言う人々とは、ファリサイ派の者たちであることは間違いありません。その中には、律法の専門家も含まれていたことは、３節に、その名が出てくることからも明らかです。彼らは、罠を張って、虎視眈々と、主イエスがどうした行動に出るか、窺っていたのです。そのために、彼らは、わざわざ主イエスの目の前に、水腫を患っている人を座らせていました。

水腫とは、どのような病気なのか、辞書を引きますと、「（体の）組織の隙間や体腔中に

多量のリンパ液がたまる病気、むくみ」と、出ていました。この病気を患うと、どう言う症状が出るのか、或いは、ひょっとして、この人の場合、手足がむくみ、見て直ぐ、それと分かる状態だったのかも知れません。いずれにしても、当事者にしてみれば、辛い、苦しい、また、恥ずかしい病だったことでしょう。気の毒な話しですが、彼はこの時、言わば、主イエスを捕える囮（おとり）に使われたのです。主賓である主イエスの真ん前に、敢えて、常識的に言えば、この場には場違いな彼が座らされていた、と言うことは、彼ら、ファリサイ派の者たちの、策略だったことは、明白です。目の前に、水腫を患う者を見ながら、主イエスが、何もせずにおられるわけがない、と、彼らは見抜いていたのです。彼らの見立ては図星でした。案の定、主イエスは、この水腫の男を見て、一瞬も黙ってはおられず、直ちに、彼をお癒しになるのですが、それは、周囲の者たちの悪意には何も気づかず、ただ無邪気に、思わず知らずお癒しになる、と言った、人の良さだけが際立つ、純粋な人に見られる、自然の行動ではなく、寧ろ、暗黙の彼らの挑戦を、素早く察知して、逃げも隠れもせず、正々堂々と、これを受けて立つ、否、これに立ち向かって行かれる、と言った方がより適切な、毅然たる、更にそれ以上に、勇猛果敢とさえ言える行動を、主イエスは取られたのです。と言うのは、３節には、原文では、「そして、答えて、イエスは言われた」と、日本語には訳されていない、「答えて」と言う分詞形の動詞が先ず出て来るからです。実際には、律法の専門家もファリサイ派の人々も、何一つ主イエスに、問い掛けてはいないのです。でも、心の内では、盛んに問い掛けていたのです。それは、主イエスには、ひしひしと伝わっていたのです。彼らは、ずる賢く、言葉には表さず、水面下で、「さあ、どうする。答えてみろ」と、問い掛けていたのですが、主イエスには、すべてはお見通しだったのです。今まで、水面下で起こっていた暗闘が、ここに来て、主イエスによって水面上に引き出され、すべてが白日の下に晒されることになったのです。

３節を読みます。「そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。『安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか』」。安息日には一切の労働が禁じられていました。医者にとって、治療行為は労働と見做され、余程緊急を要する場合以外、翌日に回されたのです。食事の用意も労働と見做されましたから、安息日の食事は前日に用意されたのです。この度の、昼食会も前日から用意されていましたから、出来たことなのです。兎に角、安息日には、殆ど如何なる労働も禁止さていて、ファリサイ派の人々は、殊の外、これを厳格に守り、人々にも、安息日律法を犯さぬよう、厳しい目を向けていたのです。だから、当然彼らは、主イエスに、「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか」と問われて、「いない」と、言うべきところ、彼らは黙っていたと言います。先に答えて、下手に主イエスに言質を取られないための、それが、彼らの知恵の一つだったのでしょう。

主イエスは、そうした卑怯な彼らの態度を見て、一瞬、怒りを覚えられたに違いありません。だから大胆にも、行動をもって答えられたのです。主イエスは、病人の手を取り、病気を癒し、直ちに、彼を家にお帰しになりました。恐らく、普通の体には不釣り合いな程、むくんで大きく膨らんでいた病人の手を、労わるように、取り上げられたのでしょう。主イエスの恐れを知らない、全き愛から溢れ出る、咄嗟のその行動、もうそれだけで、彼の病は癒えました。そして、主イエスは、直ちに、彼を、その場から解放すべく、家に帰されるのです。この病人にとって、その場は、ただイエスを嵌める囮に利用されるために、恐らく強引に、連れて来られ、座らされていただけの、針の筵のような場所だったでしょうから、居心地が良いわけがありません。一時も早く、解放されたい、と、彼は願っていたはずです。主イエスは、そんな彼の気持ちを汲んで、身も心も解放すべく、病を癒され

た後は、即座に、その場から立ち去るよう、促されたのです。主イエスが抱かれる、病む者への労わりの心の、何と濃やかで、行き届いていたことでしょう。癒せばそれでしまい、と言うのとは違うのです。主イエスは、人間の心を何よりも大切にされるのです。

主イエスは、水腫の人を癒し、家に帰された後、律法の専門家たちやファリサイ派の人々に向かって、こう言われました。５節です。「あなたたちの中に、自分の息子か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」と。日本にも「惻隠の情」と言う言葉があります。或る人が、これを説明して、子供が井戸に近づき、覗き込んで、今にも落ちそうになった時、人は、後先を考えず、いきなり飛んで行って、助けようとするだろう。そうした咄嗟に現れる憐みの心を指すのだ、と、そう言いました。あれこれと講釈を垂れている暇など、ないのです。律法の専門家にしても、ファリサイ派の者たちにしても、自分の子供、自分の牛が井戸に落ちたなら、悠長に、今日は安息日だから助けるのは明日にしよう、などと、果たして本当に言うだろうか。そんなこと、考える暇もなく、一時も早く助け出そうと、人を呼び、道具を探し、それこそ必死になるのではないか。悠長に構えて、今日は安息日だからいけない、と言えるのは、事柄を、我がこととして考えていないからで、他人事として考えている限り、人は、何だって、尤もらしい理屈が言えるのです。

何故、本来喜ばしいはずの安息日が、律法によってがんじがらめにされたのか。問題は、人間から離れて、安息日律法が独り歩きを始め、あれも駄目、これも駄目、と、ダメダメ尽くしになり、やがて、律法自体が至上の権威を持ち、本来、人間を生かすための規則が、逆に、人間を縛りつけるものになってしまったからなのです。マルコによる福音書２章２７節で、主イエスは、「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主でもある」と、言われました。冷静に考えてみれば、当たり前のことなのですが、安息日のために人があるのではなく、人のためにこそ安息日があるのです。だから、すべての縛りから解放するために来てくださった人の子、即ち、イエス・キリストは、安息日の主として、崇められ、讃えられるのは、当然のことで、そのイエスを、安息日破りとして非難し、断罪しようとすることは、とんでもない的外れ、見当違いも甚だしい、と、言うことになるのです。

ここで折角の機会ですから、本来安息日とはどのような趣旨の下に定められたのか見ておくことに致しましょう。今日は聖書朗読の折り、旧約聖書からは出エジプト記２０章８節から１１節までの、十戒の第四戒、安息日に関する掟を記した部分を、共に聞きました。あそこには、何故安息日が守られねばならないのか、その理由が、「六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」と、述べられていました。天地創造の初め、主なる神は、六日に亘ってこれらを造り、七日目には休まれ、この日を聖別して、造られたもの皆と、喜び祝い、特に、交わりを深くしたいと願われたのです。当然、創造の冠である人間は、神の創造の御業を褒め称え、感謝し、主に仕える思いを新たにする日として、この日を安息日として、大切に守ることになったのです。申命記５章１２節から１５節までにも、十戒の第四戒が出て来ますが、こちらでは、安息日を守る理由が出エジプト記２０章とは異なり、「あなたがたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るように命じられたのである」と述べられ、安息日には、殊の外、男女の奴隷を休ませよ、と厳命されるのです。今一つ上げるとすれば、エゼキエル書２０章１２節で、ここには、「また、わたしは、彼らに安息日を与えた。これは、わたしと彼らとのしる

しとなり、わたしが彼らを聖別する主であることを、彼らが知るためであった」と、述べられています。安息日とは、主なる神がイスラエルの民を、御自身の聖なる民として選ばれたことの“しるし”であって、これを守ることを通して、選ばれた民は、その自覚を強め、世に主を証することになるのだ、と言うのです。

以上が、旧約聖書が示す、安息日が守られる、そもそもの理由なのですが、では、新約聖書ではどうなったのか、と言うと、安息日は、週の終わりの土曜日から、週の初めの日曜日に移されました。当初、初代教会に於いては、土曜安息を守りつつ、日曜日は、主の復活の日として、これも同時に守られたのです。が、時代を経るに従い、何時しか、キリスト教会では、日曜礼拝だけが守られるようになって行きました。

私たちが、この後、歌うことにしている讃美歌５４番では、その２節に於いて、こう歌われます。「この日ひかりは　やみに照りぬ、この日わが主は　よみがえりぬ、この日みたまは　世にくだりぬ。げにも栄えある　このあしたや」と。この歌詞は、クリストファー・ワーズワースの作で、彼は、有名な詩人ウイリアム・ワーズワースの甥に当たります。彼自身優れた聖職者、神学者でしたから、その歌詞の内容にも、深みがあります。天地創造の第一日目、その日は、後に日曜日と呼ばれるようになりました。創世記１章３節によると、この日神は、「光あれ」と言われると、光があった、と言います。「この日ひかりは　やみに照りぬ」とは、これを歌っているのです。確かに、主イエスは日曜の朝まだき、復活されました。それから５０日目のペンテコステの日も、やはり同じく日曜日でした。その日曜日に、聖霊が下ったのです。初めて、光が出来、闇を照らしたのが日曜日ならば、死を打ち破って主エスが復活されたのも日曜日で、何と、聖霊までも日曜日に下ったのです。こんな意義深い日曜日を祝わずして、一体どの日を祝ったらよいのでしょうか。日曜日ほど、安息日に相応しい日はない、と誰もが認め、今日（こんにち）の如くなったのです。

その趣旨を汲んで、私たちも大切に、何よりも喜びと感謝に満ちた日として、安息日を守り抜きたいと思います。

（三輪恭嗣）